

# 日本語と中国語の第三者敬語における「親」・「疎」の働きの比較対照

—日本人と中国人大学生の言語調査を中心に—

郭 俊 海

## 1. はじめに

敬語、特に聞き手敬語に関する研究は多くなされているが、第三者敬語についての研究はまだ少ない。第三者敬語の使用は何によって規定されるかについて井上(1972)は「第三者への敬語の使用も実は話し相手に規定される」と述べている。つまり、聞き手への配慮が第三者敬語の使用に深く影響している。周知のとおり、聞き手、話し手、話題主はいずれも性別、年齢、地位、職業など多様な属性からなる集合体であって、聞き手に対する配慮は即ち、これらの属性への配慮になる。

敬語使用の際に、いったいどのような属性が優先的に考えられるかについて、芳賀(1979)は「敬語の場合には、話題の条件がさらに区分されて、話題の中で言及される人物や事物が、話者に対して上位の者か下位のものか、あるいは対等の者かという上下関係、身内の者か他人かという内外関係がさらにその言葉構造の決定要因になるようである」と「上下関係」と「内外関係」をあげている。さらに井上(1983)は社会構造の変化と敬語の将来について、「話し手と話し相手との心理的親疎関係を重視しよう……」との見方を示している。実際の言語生活の中で、はたしてそうであるかどうかは、客観的に実証する必要がある。鄭(1987)は、第三者に対する待遇は聞き手との上下関係によって選択されるとの結論を示したが、一方、荻野(1991)が「相対敬語的な性格が強まれば、敬語の使用基準は必ずしも上下関係に限定されず、親疎関係をはじめさまざまな社会関係によって使い分けられるようになろう」と指摘しているように、第三者への敬語使用は聞き手との上下関係によって規定されるとしても、上下関係以外の要因による影響がまったくないとは言い切れない。それは敬語の使用を左右する要因はさまざまであり、これらの要因はいつも単独で働いているわけではなく、常に他の要因と絡んで作用しているだろうと考えるからである。

そこで、小論は第三者敬語の使用を左右する外的要因のうち、親疎関係と上下関係を組み合わせ、この二つの属性が聞き手と話題主との関係によって、如何に第三者への敬語表現に影響するかを考察することにした。考察は日本と中国の大学生の言語調査を中心に、あることばを、どのような聞き手に向かって、どのような話題主について、如何なる言語形式で表現するかを調べ、そのデータに基づいて、日本語と中国語の第三者敬語における「親」と「疎」のはたらきの共通点と相違点を見出し、中国人の日本語学習

者が適切に敬語を運用する能力を高めることに結びつけたい。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査の目的

本稿は、現代日本語と中国語の第三者（以下、話題主と称す）敬語の使用を左右する外的要因として、親疎関係や上下関係が如何に働くかまた言語形式の面でどう使い分けられるかの実態を明らかにすることを目的とする。

- ① 話題主への待遇には話し手と聞き手との上下・親疎関係がどう働くか。
- ② 話題主への待遇には話し手と話題主との上下・親疎関係がどう働くか。

### 2.2 調査の内容

話し手の聞き手および話題主との相互関係が話し手の話題主への敬語表現に及ぼす影響を明らかにするために、上下・親疎という二つの要因が絡み合ったそれぞれ9種類の聞き手と話題主を以下のように想定した。

(1) 話し手：大学生

(2) 聞き手・話題主：

1. よく話し合うことのある指導教官A1 ……………親しい・上位のもの
2. よく話し合うことのある同級生B1 ……………親しい・対等のもの
3. よく話し合うことのある後輩C1 ……………親しい・下位のもの
4. 少し話したことのある助手A2 ……………やや親しい・上位のもの
5. 少し話したことのある同学年生B2 ……………やや親しい・対等のもの
6. 少し話したことのある低学年生C2 ……………やや親しい・下位のもの
7. あまり話したことのない先生A3 ……………あまり親しくない・上位のもの
8. あまり話したことのない同学年生B3 ……………あまり親しくない・対等のもの
9. あまり話したことのない低学年生C3 ……………あまり親しくない・下位のもの

A、B、Cはそれぞれ上位、対等、下位のような上下の意味を示し、数字の1、2、3はそれぞれ「親しい、やや親しい、あまり親しくない」という親疎の度合いを表している。そして、大学生が毎日の学生生活の中で、身近に接するものとして、上記の1～9の中のある人に向かって、それ以外の人について「誰それが学会にくるか」というときの「誰それ」、「くるか」の部分をどう言うかを空欄に自由に記入してもらった。全部で72の場面ができたが、ここでは「誰それ」の部分だけを扱いたい。

### 2.3 調査の実施と被調査者

調査用紙はまず日本語文を作成し、中国語に訳す形にした。日本語の調査は1992年6、10月に筑波大学で国語と日本文法の授業時間に国際関係・自然・基礎工学・日本語日本文化学類の大学生(男40、女45)計85人、中国語は1992年8月に、哈爾濱師範大学生物・化学学部の大学生(男45、女55)計100人を対象にし、それぞれ授業時間に集団調査を行

った。

## 2.4 集計の手順

項目「誰それ」には呼称として、日本語は「～先生」、「～さん」、「～くん」、「呼び捨て」と「ニックネーム」の五つの回答があった。これらの呼称はすべて「姓のみ+先生(さん、くん、呼び捨て)」の形であって、例えば、田中一郎という人のことを「田中先生、田中さん、田中くん、田中」と呼ぶような回答であった。一方、中国語も「～老師／～先生」、「～同学／～さん、～くん、呼び捨て」、「小～／～さん、～くん」、「直呼其名／呼び捨て」、「綽号／ニックネーム」の五つの回答があった\*。日本語も中国語も「ニックネーム」の使用が少なかったのをそれを無視してまとめた。

## 3. 分析の結果

それぞれの聞き手との親疎関係による、話題主への影響を見るために、話題主を上位、対等、下位の三段階に分けて分析した。数字だけでは語形の頻度数とそれによって表出された人間関係および場面との関係をとらえにくいので、積み重ねの帯状グラフで示すことにした。表1と表2にもとづき、日本語と中国語でそれぞれ9枚のグラフができた。各グラフで示された「誰それ」の使い分けには似たような傾向が見られたので、ここでは聞き手および話題主がそれぞれ「指導教官」A1と「同級生」B1と「後輩」C1の場合をとりあげて見ることにした。

### 3.1 日本語の場合

#### 3.1.1 聞き手との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

まず、図1-1を見ると、話題主の「指導教官」A1は話し手にとって上位の存在であるので、呼称の面で「～先生」が最も多く使われているが、C1、C2、B1、B2に対して言う場合、「～さん」だけでなく、「呼び捨て」も使われている。つまり、同じ「田中」という先生のことを後輩や同級生、やや親しい同じ年頃の人に言うとき、「田中」や「田中さん」のような尊敬でない言い方をしていることが分かった。

一方、「親しくない低学年生」C3と「親しくない同学年生」B3に対する場合は、話題主への「呼び捨て」の使用がまったくなく、「～さん」が使われているが、それぞれ11.9%、9.5%に止まっており、ほぼ聞き手が上位のA2、A3の場合と似ている。

聞き手が上位の関係にあるA2、A3になると、話題主へは「呼び捨て」がまったく用いられず、しかも、「～さん」も対等や下位の聞き手に対する場合より少なくなっている。つまり同じ上位、対等、下位の聞き手に対しても、親しくない聞き手に対する場合の話題主への待遇が高くなる。

図1-2は話題主が話し手と対等な場合で、図1-3は話題主が話し手より下位の場合であるので、話題主に用いられる呼称は「～さん」、「～くん」、「呼び捨て」しか考えられない。この場合も、聞き手がC1からC3、B2からB3、A1からA3へと親しくなくなるほど、「～さん」や「～くん」が多く使われ、「呼び捨て」が次第に少なくな

表1 場面による話題主への「誰それ」の使い分けの全体傾向

(日本語の場合)

数字は百分率

話題主	呼称	聞き手								
		C 1	C 2	C 3	B 1	B 2	B 3	A 1	A 2	A 3
C 1	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん		27.1	29.8	27.1	29.4	34.5	32.9	32.9	33.3
	～くん		14.1	21.4	9.4	21.2	25	30.6	23.5	29.8
	呼び捨て		58.8	48.8	63.5	49.4	40.5	36.5	43.5	36.9
C 2	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん	35.3		51.2	40	40	53.6	43.5	48.2	56
	～くん	14.1		17.9	18.8	21.2	29.8	36.5	28.2	38.1
	呼び捨て	50.6		31	41.2	38.8	16.7	20	23.5	6
C 3	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん	43.5	44		37.6	45.2	57.1	49.4	44.7	60.7
	～くん	23.5	25		24.7	25	26.2	36.5	34.1	33.3
	呼び捨て	32.9	31		37.6	29.8	16.7	14.1	21.2	6
B 1	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん	27.1	25.9	33.3		24.7	26.2	37.6	41.2	16.7
	～くん	11.8	17.6	20.2		12.9	16.7	28.2	27.1	35.7
	呼び捨て	61.2	56.5	46.4		62.4	57.1	34.2	31.8	47.6
B 2	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん	41.2	40	51.2	37.6		52.4	45.9	45.9	57.1
	～くん	21.2	20	32.1	22.4		29.8	37.6	34.1	33.3
	呼び捨て	37.6	40	16.7	40		17.9	16.5	20	9.5
B 3	～先生	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～さん	43.5	42.3	53.6	40	44.7		50.6	44.7	61.9
	～くん	23.5	35.3	28.6	29.4	35.3		35.3	34.1	33.3
	呼び捨て	32.9	22.4	17.9	30.6	20		14.1	21.2	4.8
A 1	～先生	80	83.5	88.1	78.8	82.4	90.5			
	～さん	10.6	10.6	11.9	12.9	14.1	9.5		8.2	6
	～くん	—	—	—	—	—	—		—	—
	呼び捨て	9.4	5.9	0	8.2	3.5	0		0	0
A 2	～先生	11.8	14.1	15.5	10.6	12.9	21.4	20		22.6
	～さん	82.4	77.6	81	84.7	78.8	73.8	80		77.4
	～くん	—	—	—	—	—	—	—		—
	呼び捨て	5.9	8.2	3.6	4.7	8.2	4.8	0		0
A 3	～先生	90.6	90.6	96.4	85.9	91.8	95.2	91.8	97.6	
	～さん	4.7	8.2	3.6	8.2	5.9	4.8	8.2	2.4	
	～くん	—	—	—	—	—	—	—	—	
	呼び捨て	4.7	1.2	0	5.9	2.4	0	0	0	

る傾向が見られる。図1-2を見ると、「後輩」C1に聞くときの「呼び捨て」が61.2%であったが、「親しくない低学年生」C3に聞く場合には46.4%で、14.8%減っている。図1-3でも同じような傾向が見られる。図1のいずれの場合でも、聞き手との親しさが減少するにしたがって、話題主への待遇が高くなるという段階も見られる。

表2 場面による話題主への「誰それ」の使い分けの全体傾向

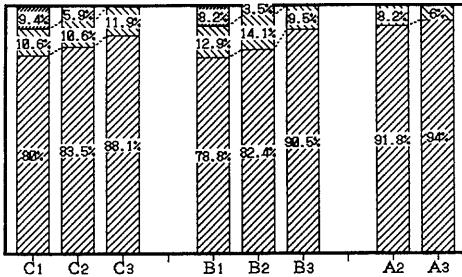
(中国語の場合)

話題主	呼称	聞き手								
		C 1	C 2	C 3	B 1	B 2	B 3	A 1	A 2	A 3
C 1	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	—	14	19	13	10	11	12	14	11
	小～	—	11	17	17	14	24	9	12	13
	直呼其名	—	75	64	70	76	65	79	74	76
C 2	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	7	—	33	16	33	32	29	21	37
	小～	18	—	10	17	10	9	4	11	8
	直呼其名	75	—	57	67	57	59	67	68	55
C 3	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	26	33	—	25	30	40	35	34	43
	小～	12	9	—	8	12	8	4	5	7
	直呼其名	62	58	—	67	58	52	61	61	50
B 1	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	6	17	17	—	12	13	14	17	18
	小～	19	13	12	—	11	16	7	7	9
	直呼其名	75	70	71	—	77	71	79	76	73
B 2	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	8	35	35	21	—	33	31	25	37
	小～	11	6	9	11	—	9	6	8	9
	直呼其名	81	59	56	68	—	58	63	67	54
B 3	～老師	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	～同学	26	36	43	28	34	—	37	28	42
	小～	3	5	6	7	6	—	3	7	8
	直呼其名	71	59	51	65	60	—	60	65	50
A 1	～老師	100	100	100	100	100	100	—	100	100
	～同学	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	小～	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	直呼其名	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A 2	～老師	100	100	100	100	100	100	100	—	100
	～同学	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	小～	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	直呼其名	—	—	—	—	—	—	—	—	—
A 3	～老師	100	100	100	100	100	100	100	100	—
	～同学	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	小～	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	直呼其名	—	—	—	—	—	—	—	—	—

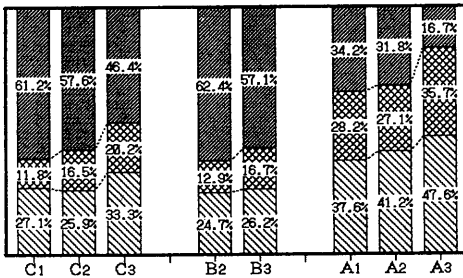
上位の聞き手に対する場合、話題主への待遇がやや高くなるという結果から言えば、話題主への待遇は依然として上下関係に影響されるが、どちらかという、話し手と聞き手の親疎の距離によって、親しくない聞き手に対するほど話題主への待遇が高くなる傾向が強い。つまり話し手の聞き手との上下関係より、その親疎関係のほうがいっそう話し手の話題主への待遇に影響していると言える。

呼  
称

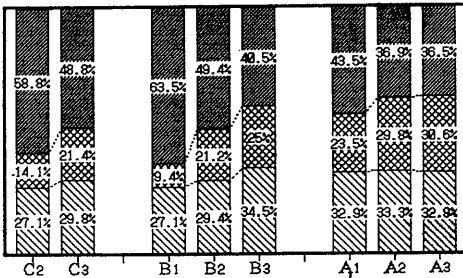
1-1 話題主の「指導教官」A1への待遇



1-2 話題主の「同級生」B1への待遇



1-3 話題主の「後輩」C1への待遇



聞き手  
 □ ~先生   □ ~さん   □ ~くん   □ 呼び捨て

図1 聞き手との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

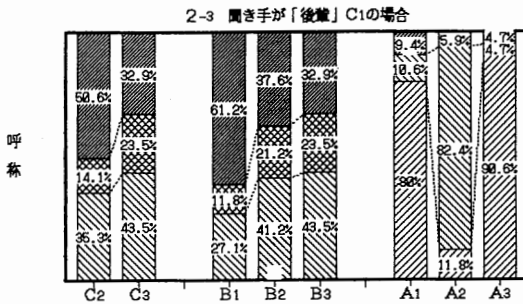
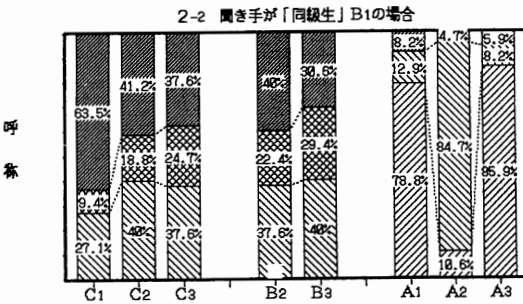
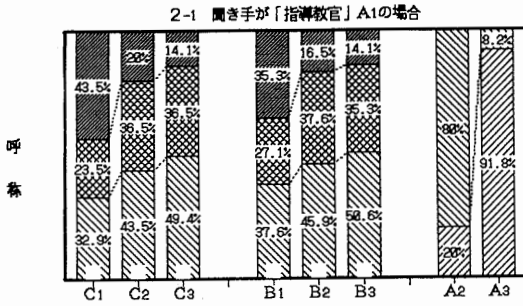
に多かった。これはおそらく「助手」を「先生」と同一レベルの人間として扱わず、「先生」より低く待遇したためであろう。

このように、同一の聞き手に対して複数の話題主について言及するとき、話題主が親しくないほどその話題主への待遇が高くなる。特に、上で見てきたように、下位または対等な関係にある話題主への待遇には、話題主との上下関係とはほとんど関係がなく、

### 3.1.2 話題主との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

これは聞き手が一定している場合、話題主自身との関係が如何に話題主への待遇に影響するかを見ようとしたものである。図2を全体的に見ると、同一聞き手に対して、それぞれの話題主への「誰それ」の使い分けが、話題主がC1からC2、C3；B1からB2、B3そしてA1からA2、A3へと変わることによって「～さん」、「～くん」の使用が多くなり、「呼び捨て」が少なくなるのである。例えば、図2-1では、「呼び捨て」は後輩C1には43.5%も用いられたのに対して、「親しくない低学年生」C3にはわずか14.1%である。また、話題主の「同級生」B1には「呼び捨て」が35.3%であったが、「親しくない同学年生」B3には14.1%である。

一方、話題主が上位のAの場合になると、「呼び捨て」や「～さん」の使用が少なくなっていくが、これもやはりA2からA3へいくほど下がっていく傾向である。ただし、図2のいずれの場合でも、「助手」A2について言うときの呼称の使い分けは、先生のA1、A3に比べると、「～先生」が少なく、むしろ「～さん」の使用が圧倒的



話題主  
 □ ～先生    ▨ ～さん    ▩ ～くん    ■ 呼び捨て

図2 話題主との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

むしろそれらとの親疎関係によって制約される傾向が大きいと言える。話し手の話題主への待遇には聞き手との関係が関与しているだけでなく、話題主との親疎関係もかなり影響している。つまり、話題主が話し手に親しくなくなるにつれ、より丁寧な呼称を使い、話題主を高く待遇するのである。

### 3.2 中国語の場合

日本語の場合と同じように話題主を上位、対等、下位に分け、各段階における話題主を待遇する場合の聞き手との関係を分析した。

#### 3.2.1 聞き手との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

表2のとおり、聞き手が親疎的、上下的に如何に変わっても、上位の話題主「指導教官」A1、「やや親しい助手」A2、また「あまり親しくない先生」A3への「誰それ」には、「～老師／～先生」の一種類しか用いられなかったので、ここでは対等や下位の関係にある話題主だけの場合について分析したい。

まず、聞き手との上下関係から見てみよう。図3-1では、聞き手が話し手にとって如何なる関係であっても、対等な話題主「同級

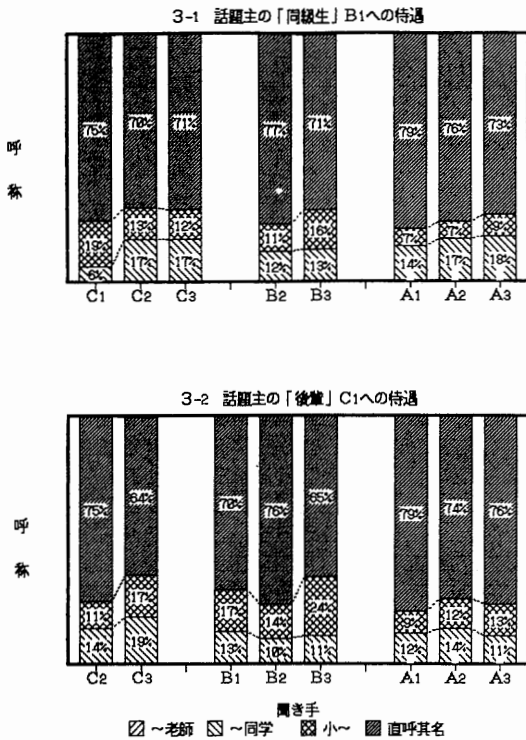


図3 話題主との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

た。このような事実から、聞き手との上下関係による話題主への待遇の影響があるとは言い難い。

次に、聞き手との親疎関係による影響はどうであろうか。図3-1では、聞き手がC1からC3、B2からB3そしてA1からA3へと変わることによって「~同学」や「小~」が少しずつ多く使われ、「直呼其名」の使用が相対的に少なくなる傾向がある。図3-2では、B2に対する場合はB1よりも「直呼其名」がやや多く使われているが、全体的な傾向はやはり図3-1と似ている。すなわち、親しい聞き手から親しくない聞き手へと話題主への待遇が少しずつ上がっていく。しかし、聞き手が上下的に変わっていても、話題主への「~同学」、「小~」、「直呼其名」といった呼称上の使い分けにはほとんど変わらない。図3-1と図3-2で見た結果をまとめると、話題主への待遇に影響する要因は聞き手との上下関係より親疎関係のほうが比較的大きいと言える。

### 3.2.2 話題主との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

まず、図4の全体をまとめて言うと、下位と対等な関係にあるC1、C2、C3；B1、B2、B3には、呼称の使い分けが異なっており、いずれも親しい「後輩」C1から「親しくない低学年生」C3へと「~同学」が多く用いられ、「直呼其名」が少しずつ減少していく。例えば、図4-1の「親しくない低学年生」C3に対して用いられた「~同学」は35%となり、「後輩」C1の12%よりはるかに多い。この三つの場合で、どれもがC1からC3、B1からB3へと、「~同学」が多く使われる傾向である。

次に、下位の関係にある「C1~C3」と対等な関係にある「B1~B3」への呼称の使い分けでは話題主への待遇に大きな差がないが、やはり話題主が親しい人間から親しくない人間へと変わることによって、「~同学」が多く用いられ、「直呼其名」が次第に減っていく傾向である。つまり、話題主との「親しい→やや親しい→親しくない」と



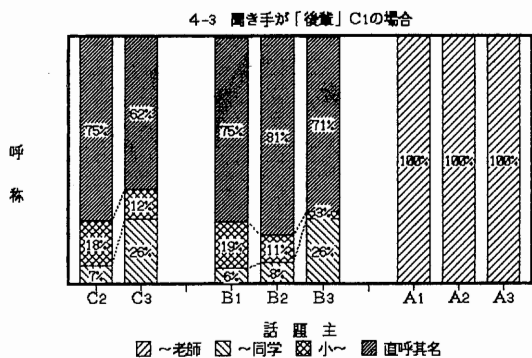
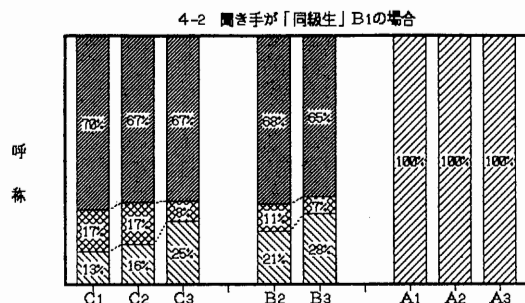
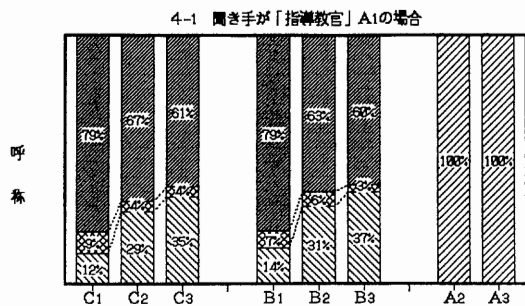


図4 話題主との関係による話題主への「誰それ」の使い分け

やはり日本語の敬語が相対的に変わってきていることを反映している。一方、中国語の場合は上位の話題主へは「～老師」だけであった。これは、おそらく中国の大学では、教壇に立つ教師はもちろん、大学関係者の他の人についても「～先生」と呼ぶ習慣があるからである。つまりこれらの人の肩書きは必ずしもはっきりしているとは限らず、学生の立場から考えれば、とにかく「～先生」で呼んだほうが礼儀正しく無難だと思われ

いう親疎関係によって「～同学」のような丁寧な言い方がより多く使われる。「小王」、「小李」のような「小～」の使用も主に話題主が「後輩」C1か「同級生」B1の場合に集中しているが、他の話題主にはあまり用いられていない。

このように、話題主が同じ対等な関係にある人間の場合でも、話題主への待遇はそれら自身との親疎関係によって制約されている。つまり、話し手の話題主への待遇には、話題主との上下関係より親疎関係がより重視され、一定の聞き手に言うとき、親しい話題主をより低く待遇し、親しくない話題主を高く待遇する傾向である。

#### 4. 日中の呼称の比較

以上見てきたように、話し手の話題主への待遇は呼称の面において著しく現れている。しかし、呼称の使用は日本語は中国語と大きく違っている。

まず、日本語では、上位の関係にある「指導教官」A1、「やや親しい助手」A2、「親しくない先生」A3の三者については、「～先生」が最も多く使われたが、聞き手が親しくなるにつれ「～さん」や「呼び捨て」の使用もあった。これは

るためでもあろう。中国人留学生が日本の大学の事務関係者を「～先生」と呼ぶようなことがしばしばおこるのもこの例である。

次に、日本語の「～さん」は、性別年齢を問わず、かなり広い範囲に使われる。しかし、中国語では日本語の「さん」に当たるようなことばが見あたらない。そもそも中国語の「～同志」が日本語の「～さん」に相当すると思われるが、必ずしも妥当ではない。蘇(1981)によれば、それは「さん」と一対一で対応するような呼称表現は中国語にはない。場合によって「先生」「同志」「姑娘」などが対応し、また場合によっては何もつけない。つまり呼び捨てが対応しているからであろう。

また、日本語では「～くん」が「～さん」ほど広く使われない。この点については今度のデータからも分かるように、一般的に主に目上が目下または対等な男どうしの間でよく用いられるが、女性に対してはあまり用いられない。中国語の「小～」は目上が目下、または対等な者どうしの間で用いられる点は日本語の「～くん」の使い方と似ているが、男、女性のいずれに対しても用い得るという点では日本語と違っている。

さらに、本論で見たかぎりでは、日本語の「呼び捨て」は親しい関係以外の場合はほとんど用いられていない。それに対して、中国語の「直呼其名」の使用は上位の話題主以外はほとんどであった。これはおそらく中国では、テレビやラジオなどマスコミだけではなく、公の場合でも人を呼び捨てにするという習慣があるためであろう。親しい人に用いる場合は、日本語の「呼び捨て」と同じように親しみが生じ親近感をもつが、親しくない人に対して使うと、日本語の「～さん」や「～さま」と似たような改まった、敬遠のニュアンスが生じるという二重の性格を持っていることが今度のデータで証明できたと思われる。中国語の「呼び捨て」は日本語のとは完全に対応していないことは、中国人学習者がよく「～さん」や「～くん」などのような呼称を抜きにして日本人に話しかける原因の一つでもあろう。

## 5. おわり

以上、本稿において現代日本語と中国語の第三者敬語の使用を左右する外的要因として、親疎関係や上下関係が如何に働くかまた言語形式の面においてどう使い分けられるかの実態を、「呼称」の使い分けの分析を通して見てきた。その結果を次のようにまとめた。

- (1) 日本語では、話し手の第三者への待遇は聞き手との上下関係に影響されるが、どちらかという、親疎関係のほうがより優先的である。つまり、聞き手が話し手に親しくないほど話題主への待遇が高くなる。中国語の場合は、聞き手との上下関係にはあまり左右されないが、親疎関係による影響が大きい。
- (2) 日中両語において共通する点は、話題主への待遇は聞き手との上下・親疎関係によって決まると同時に話題主自身との関係にも左右されることにある。これもまた話題主との親疎関係がより重視される。すなわち、話題主が話し手に親しくないほ

ど話題主への待遇が高くなる傾向があつて、話題主との上下関係にはあまり影響されない。

- (3) また、話題主への待遇は、聞き手や話題主自身との親しいか親しくないかのどちらかによってきれいに分けられるのではなく、聞き手または話題主が話し手に「親しい—やや親しい—あまり親しくない」のように「疎」の度合いが強くなるにつれ、話題主への待遇が段階的に少しずつ上がっていくという傾向である。

今回は第三者敬語の使用を決定する外的要因として、話し手が聞き手と話題主との関係を中心に上げた。本来ならば、聞き手と話題主との関係についても触れるべきであるが、今後の研究としたい。

#### 参考文献

- (1) 井上史雄 (1972) 「第三者への敬語」『国語学』90集、79頁、国語学会
- (2) 井上史雄 (1983) 「社会構造の変化と敬語の将来」『日本語学』、1月号、18頁、明治書院
- (3) 荻野綱男 (1991) 「日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』第141輯、31～32頁、朝鮮学会
- (4) 興水 優 (1979) 「中国語の敬語」『岩波講座日本語 4 敬語』273頁、岩波書店
- (5) 蘇 徳昌 (1981) 「日漢敬語的比較と翻訳」『日語学習と研究』総8号、15頁、日語学習と研究雑誌社
- (6) 鄭 恵卿 (1989) 「現代日本語における「話題主」と「聞き手」の上下関係が話し手の敬語表現に及ぼす影響」『日本語と日本文学』11号、9～28頁、筑波大学国語国文学会
- (7) 芳賀 純 (1979) 「敬語の心理学」『国文学 敬語の手帳』、第26巻2号、26頁、学燈社
- \* 中国語の「～同学」、「小～」、「直呼其名」が日本語の「～さん、～くん、呼び捨て」にあたるかどうかは議論するつもりがないが、意味としてはあえて上記の日本語の呼称に対応させた。

本稿は1993年3月、筑波大学地域研究研究科に提出した修士論文の一部を加筆し書き改めたものです。修論作成また本稿をまとめるにあたり、筑波大学の芳賀純先生をはじめ、荻野綱男先生、坪井美樹先生、堀口純子先生、北海道教育大学の吉見孝夫先生にご指導ご助言をいただきました。ここに深く感謝致します。

(シンガポール国立大学 日本研究学科客員講師)